

第三回 こののはじまり (三)

もう六年以上前だったと思う。そのころ家族ぐるみで親しくさせていただいた妻の友人のお宅に、年に何度かお邪魔させていただいていた。別荘のように使われていたけれど、とても広い庭に色とりどりの草花をセンス良く配し、赤白の葡萄の棚や、栗やプルーンなど実のなる木もたくさんあり、「なんとかの庭」という趣だった。おうちもさすが建築家と思わせる品のある佇まいで、とても心地よい時間を過ごさせていただいていた。冬に訪れる鳥たちを間近に見られるのも驚きだった。

そんなお宅を訪ねたのはちょうどゴールデンウィークの頃だったと思うが、ご主人が突然「隣の土地が売りに出ているみたいだけど、ここは市街化調整区域なので資材置き場か廃車置き場などにされたら困るんだよね。石塚君、買わない？」と。

それが今暮らしている土地なのだが、その時は、どうも話の筋が自分ごととして思えなかった。確かにお隣が資材置き場などになったら、それも地形的に一段低い土地なので見下ろせば丸見えになり困るだろうけど、それで困るのは私ではない。笑ってすまそうとしたが、なんせ暇なゴールデンウィークの時だったので、敷地を探検しようということになった。他人の土地に勝手に入るのだから探検ごっこで済まされることでもないのだが、とにかく背丈ほどある草が鬱蒼と茂っていて人は住んでいないのは明らかかな荒地で、まあ、いいだろうということになってしまった。

入ってすぐのところは笹藪で、大きな木が何本も生えていた。なかには朽ちかけた大きな木もあり探検感はかなりのものであったと記憶している。その先には春先だったのでよもぎがいっぱい生えていたが、同時にガマの姿も増え始め、足元は一步踏み出すとズブっと沈む状態に。要は完全な湿地状態。地面に目をこらすと水たまりがあちこちに見え、油のような虹模様の膜が浮かんでいた。かなり遠くには、屋根が落ちかかった廃屋があるのも見えた。

もし仮に私が買ったとしても、資材置き場か廃車置き場にすくらしいか思いつかないような、そうするにしても大変そうな土地で、ましてや住むなどということはとても考えられなかった。それなのに、お隣に住んでいるご主人の妹夫妻も「住まなくても、いろいろな楽しみ方がきつとできるよ。」と無責任に加勢してくる始末で、まるで原野商法の押し売りにあったようだった。

その後も、そこを訪ねるたびに「買おうよ」「また見に行こうよ」と誘われ続け、ある日「先日、建設業者のような人が見に来ていたので聞いたら、ログハウスの資材を置く場所を探しているって言うていた。いよいよ危ないね。」と。危ないのはこっちなのだが、とりあえず、敷地に立ててあった不動産屋の看板の連絡先に電話をしてみるようになってしまった。

会って話を聞いてみると、広さは千五百坪あり、市街化調整区域の指定前に建った家があるので、今でもその面積の一・五倍までであれば建物をつくることができ、住むこともできるとのこと。

